山大

震災後7ヵ月を経て完全復活

製材、プレカット等設備ほぼ整う

山大（宮城県石巻市、高橋貞夫社長）が東日本大震災からほぼ完全復活した。9月末に製材、木材乾燥、加工、プレカット、防虫・防蟻設備が整い、本格稼働を始めた。約7カ月間という長い道のりだったが、ようやくすべての部門がフル操業できる体制となった。

宮城県石巻市の沿岸部は、東日本大震災の津波で甚大な被害に遭った。石巻港の湖見町を中心に、工業団地は被害が大きかった。

その工業団地にある同社は、本社屋側にあった製品倉庫やプレカット工場が大破した。道を挟んで3年前に竣工した製材・加工・乾燥設備などが一式あるウッドミルも被害に遭った。

08年に竣工した新鋭木材加工場（ウッドミル）は、大断面構造用集成材を利用したサミットHR工法で建設されたことで躯体はびくともしなかったが、製材機械は塩水をかぶり、補修を余儀なくされた。木材乾燥機は10基あるうち2基を残して8基が破損した。本社前の道まで移動したものがあったほどだった。プレカット機械も津波で冠水した。

高橋社長自らが書き上げた復旧・復興計画

復旧・復興計画を手書きし掲示

震災直後の3月16日に、高橋社長は半畳ほどもある大きな紙3枚に山大の復旧・復興計画を手書きし、仮事務所の壁に掲示した。それには、まず3カ月間で瓦礫を撤去し機械復旧、6月末までには何としても工場を再開、6月月後には本格稼働するという目標が書かれていた。

高橋社長の甥に当たる高橋茂之工場長は「震災直後の現場の状況を見た時、社長は3カ月で復旧すると宣言したが、本当に3カ月で復旧できるのかなと思った」と話す。そのくらい被害は甚大だった。しかも電気、水道はなく、フォークリフト等の機械はすべて津波で壊れた。工場内にはヘドロが堆積し、瓦礫が山積みだった。そんななかでの復旧・復興への第一歩は、高橋社長自らスコップを持ち陣頭指揮をとっての工場内ヘドロ・瓦礫撤去だった。気が遠くなるような復旧作業だったが、約100人の社員が一丸となって取り組んだ。

被災後、従業員の安否を確認し、ただちに設備を点検した。点検後の判断は既存設備の約60%が使用可能というものだった。しかし、津波（塩水）で冠水した設備は時間が経てば経つほど錆が発生し、震災直後の判断より損傷がひどくなった。そこで、早急に使用可能な製材機械以外の大半の機械設備、プレカット・木材加工・乾燥機等を一新することにした。この判断が好結果を生んだ。

そして約3カ月後に、高橋社長の宣言どおり、プレカット工場から復旧し、工場内に機械音が鳴り響いた。「社長のいうとおり本当に3カ月後に復旧した。震災直後のあの状況下で、社長は何をもって、3カ月で復旧すると宣言できたのか不思議だ」（同）。しかし、それが現実となった。

工場に機械音が鳴り響く

製材、木材乾燥、加工、プレカットとあるなかで最も早く本格稼働したのはプレカットの在来加工ラインだった。試験稼働を経て6月29日から本格操業を開始した。プレカットの金物ラインもほぼ同時に試験稼働を実施し、7月上旬から合板加工とともに本格稼働した。

3カ月半聞こえなかった機械音が工場に鳴り響くと復旧・復興に弾みがついた。製材ラインもほぼ同時期に、モルダー、製材本体のチッパー・キャンターとも試験稼働を経て本格稼働に入った。これに合わせて木材乾燥機9基を新設し、ボイラーの燃焼を開始した。製材再開と併せ、木材乾燥も再開した。津波被害に遭っても無事だった2基と合わせて11基体制となった。

7月の下旬にはプレカットの羽柄機械を導入した。そして在来ラインが最新鋭機に交換したのが8月下旬だった。調整を経ての9月に本格稼働を開始した。ほぼ同時期に木材防腐処理機械も設置した。

新年度から月3000㎥の原木消費体制に

9月末時点で、製材ラインは月間1800立方㍍の原木を消費している。これを10月には2000立方㍍に、年内には2500立方㍍まで引き上げる。そして新年度の12年4月には3000立方㍍にする予定だ。一気に引き上げないのは、被災部分に未知数の部分が残っているからだ。

メーカーでは製材機械が冠水することは経験しているが、その水は真水だ。真水の冠水ならばこれまでは電源ラインの途中部分の交換で済んだ。しかし、今回は海水なので、時間経過とともに冠水した部分に塩分の被害が生じてくる可能性がある。そこで、休日に電源コードを交換している。これを継続し、機械すべての電気ラインを交換する予定だという。

遅れていたカスタムカット用の製材機も8月末には設置し、本格稼働を開始した。

乾燥能力には余裕があり、製材量のほぼ全量の乾燥化ができる。新柴設備の最新型9基（50立方㍍×9）を新設し、津波被害に遭ったが修理した2基（30立方㍍×2）に加えて、11基体制となった。当面は月間5100立方㍍×4回転で2000立方㍍以上の乾燥材生産が可能なためだ。さらに、年末から年初にかけて3基（50立方㍍×3）を増設する予定で、最終的には14基体制とする。14基で2600立方㍍の乾燥材生産が行える。

プレカットの在来ラインには宮川工機の最新鋭機V8を導入し、9月1日から本格稼働を開始した。9月中旬までは1シフト、以後は2シフト化している。現状では月間2500～2600坪の加工だ。これを受注状況にもよるが3000坪へ引き上げる。金物ラインは300～500坪の加工状況。在来、金物を合わせると、能力的には月間5000坪の加工能力があり、まだまだ余力はある。

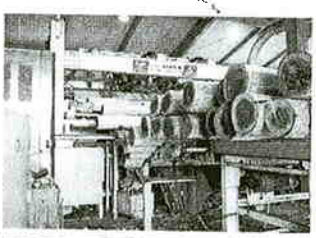
防虫・防蟻の注入釜を設置したが、インサイザーの修理が遅れており、10月中旬の設置となる。

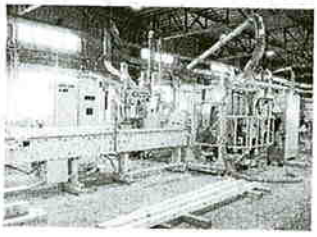
製材部門に22人、プレカット部門に22人、CADに11人、本社業務、資材販売、住宅関連業務等を合計すると約100人体制だ。

本社事務所、CAD室は9月上旬に完成し、中旬に引っ越した。あとは事務所前の外構整備を残すのみで、これが終われば文字どおり完全復活となる。

修復された製材工場・ウッドミルの外壁

↑新設された9基の新柴設備の最新鋭乾燥機


↗富士製作所と共和キカイが共同開発したチッパーキャンターも完全復旧


↘新設導入された宮川工機のプレカット最新鋭機V8

↓乾燥された杉平角製品

三百年、継承十代。三百万本を植林

三百年前の享保元年（1716年）に、故郷（ふるさと）の山と田と水への熱い思い（使命感）から、ひとりの男が裏山（現・宮城県桃生郡河北町中島）に杉の苗を植え始めました。これが山大の発祥です。この男が初代元助です。以来十代にわたり三百万本の植林を脈々と続けております。

"人類の文明は、水と緑があるところで栄え、それを食いつぶして滅んでいく"、それが歴史の繰りかえしです。

自然界における唯一の循環資源である木材。豊かな養分を含む清らかな水は、大切な故郷の森から生まれ、川や田を潤し、湾に流れ込み、魚や貝を育て、生命が誕生した海に戻ります。

次世代を担う使命として、我々はあらたに三百万本の植林を始めます。そして、植林・育林から製材・木材乾燥、プレカットまで木材を循環利用できる自社一貫管理体制を整え、森林資源を次世代に繋いでいきます。

代表取締役
高橋 貞夫

杉製材品「粋でいなせな伊達な杉」

ウッドミルで製材する"伊達な杉"は、樹齢60～70年、直径24cm以上（平均約28～30cm）の中目丸太を原料に製材しています。

辺材から製材される羽柄材はすべて芯去り材となり、曲がりや反りが少ない良質な木材となります。ところが、小径木を中心に製材する工場では、芯去り材とはならず、狂いが抑制しにくくなっています。当社で芯材から製材される角材はすべて赤身の構造材となり、狂いが少なく耐朽性に優れた材で、「赤太柱・赤太土台」としてご利用いただいております。

"伊達な杉"は、江戸時代の仙台藩（初代藩主:伊達政宗）領土で育った杉であり、「伊達な」とは魅力的な一級品を身にまとった「伊達男」という意味を表し、そのような粋なものづくりに活用していただきたく命名しました。

殖林から製材、木造建築建設に至るまで一貫したトータルプレカットシステムによりお客様のニーズに完全対応！

○在来軸組工法構造プレカット
○金物工法構造プレカット
○神社仏閣・大型木造構造プレカット
○羽柄材プレカット
○国産材製材専門工場
○床・野地合板加工プレカット
○パネルプレカット
○山大防腐防蟻処理材製造

with の思想 ともに創る、あしたの住文化。

株式会社 山大

本　　社／宮城県石巻市湖見町2－3　TEL0225-93-1111㈹
住宅資材事業部／宮城県石巻市雲雀野町一丁目7-1　TEL0225-93-1110㈹
開発生産部／宮城県石巻市湖見町2－3　TEL0225-93-9371㈹
ホーム事業部／宮城県石巻市雲雀野町一丁目7-1　TEL0225-93-1112㈹
ウッド・ミル／宮城県石巻市湖見町14－13　TEL0225-92-6131㈹